



深川 純一氏

「21世紀の
ロータリーについて」

ただ今ご紹介をいただきました深川でございます。今日はお招きに預かりありがとうございます。「21世紀のロータリーについて」というテーマをいただいております。21世紀のロータリーについて語りますには、先ず20世紀のロータリーが如何にあったのかその反省を踏まえることが、先ず基本前提であろうかと思えます。20世紀のロータリーが一体どのようなものであったのか、その延長線上に21世紀のロータリーのあるべき姿というものを考えなければならぬと思えます。そこで先ず、エポック・メイキングな出来事を概観してみたいと思えます。1905年にロータリー運動と言うものが始まりました。その最初の20年間というのは、まさに原理探求のロータリーでございます。ポール・ハリス達が厳しいシカゴの経済情勢の中で、お互いに肩を寄せ合って助け合っていく仲のよいクラブを作ろうじゃないか、と出して出発したのがロータリーの出発でございます。そこで、先ずルールを立てようというので、一つの職種から一人だけ会員を選ぶクラブ、これが第一の原則であります。それから規則的な例会出席をやっという、これが第二の原則でありまして、この二つのルールを作って出発していきました。

しかし、当初は世のため人のためという奉仕という考え方は全くございませんでした。やがて、世のため、人のためのことも考えるようであればロータリーの発展はないよ、というので奉仕概念を開発していきいます。これは1908年、ロータリーが出発し

て3年経った頃であります。その奉仕という考え方を示してからは、ロータリー運動というものを倫理運動として構成するようになっていくわけでありませす。このロータリーが倫理運動だという考え方でポール・ハリス達が原理探求をやってきました、そのハイライトが1915年サンフランシスコの国際大会で採択されました全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓、略してロータリー職業倫理訓と言っておりますが、一名ロータリー道徳律とも呼ばれております。これがロータリアンの個人倫理の確立の年でありまして、まさに倫理の提唱がハイライトを迎えた年だと申し上げてよろしかろうと思えます。それから、その当時は第一次世界大戦の真っ最中であったのでありますが、アーチ・シー・クランプという1917年の国際ロータリーの会長が、国際理解と親善のための基金を作ろうという提唱を致します。これが後に至ってロータリー財団となって実を結んでいくのであります。こういう活躍もやっていたのであります。

それから、この第一次世界大戦の終わった総括として、ロータリーは国際奉仕という概念を樹立致します。そして、これが1921年のことですが、その翌年には、どこにあってもロータリークラブという基本的な事項だけは、全世界共通にもとうという事で標準ロータリークラブ定款を採択いたします。したがって、皆さん方のクラブにあるクラブ定款は、私のクラブの定款と全く同じ物を使っております。それは、ドイツにあってもロータリークラブ、アメリカにあってもロータリークラブ、日本にあってもロータリークラブ、日本人とアメリカ人で組織してもロータリークラブ、日本人だけで組織してもロータリークラブ、そのようにどこにあってもロータリークラブであるといえる共通な事項というものを、世界中のロータリークラブは、基本的に共通にもってていこう、という考え方であります。いわば合理的な組織管理の原則をクラブ単位で作上げていったのであります。これは1922年、その年に全世界のロータリークラブの連合体であります国際ロータリーというものを作り上げたのであります。これがまさに組織原理の確立の年だと申し上げてよろしかろうと思えます。そして、1923年、その翌年でありませす、ロータリーの奉仕というの、一体何なのか、それから社会奉仕を實踐するにはどうすればよいのか、そういう形で奉仕の實踐原理を確立していったのであります。このようにみてまいりますと、1905年から始まって大体20年間、最初の20年というのは、ロータリーはまさに原理探求のロータリーで終わったということがいえるだろうと思えます。興味深いのは、このロータリーも思想の爛熟期の頃が、ちょうどアメリカでマフィアが最盛期を迎えていた時でありました。マフィアが活動をはじめたのが、1915年でありませす。そして禁酒法が出来たのが1920

年、そしてアル・カポネが逮捕されたのが1931年、まさにロータリーが隆々と栄えていった頃に、まさにマフィアも栄えておったという、非常に皮肉な符合を見る事が出来るのであります。このように致しまして、最初の20年間は、ロータリーの原理探求の時代であったということがいえるだろうと思えます。その次の20年間は、何か、当時のロータリアン達が、我々は議論をして原理を探求した。言うべきことは全て言い尽くした。しかし為すべきことは、まだ何一つ為されていない。これからは實踐のロータリーに邁進しようと言って1927年、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕の四大奉仕部門というものを考えまして、それぞれの部門について實踐を主にしたロータリーをやっという形で實踐のロータリーに入っ行っしたのであります。

したがって、最初の20年間は原理探求のロータリー、次の20年間は實踐のロータリーということがいえると思えます。そこで、實踐のロータリーの一部だけを紹介しておきます。今日は時間がございませすので、全ての紹介は出来ませす。一つ典型的な例だけを紹介しておきたいと思っております。

これは1930年から1945年にかけて、第二次世界大戦が終了した年にかけて、アメリカのロータリーがアメリカの地域社会から非常に尊敬と信頼を持って迎えられる時期がございませす。それは、彼らが世のため、人のためにこれだけのことをしたのだ、という確固たる實踐の軌跡がなければ、そのような尊敬と信頼を持って迎えられることはなかつたと思われませす、一体それは何か。「ロータリークラブに入ったらお金が儲かるよ」とか、あるいは「ロータリークラブは、いろんな福祉事業を一生懸命やっているよ」とか、あるいは「福祉施設に多額の寄付をした」とか、あるいは「ボランティア活動を一生懸命やっているよ」とか、その程度のことではこれはアメリカ国民であれば、誰でもやっていることであって、あえて賞賛に値するものではございませす。従って、この程度のことでは確固たる實踐の軌跡があつたとはいへないわけでありませす。それでは、一体何がアメリカ国民の絶賛を博したのかといひませすと、1929年から始まりますアメリカ経済社会を襲いました空前絶後の大パニックがございませす、あの時にロータリアンは一人も倒産していなかつたのであります。しかも、ロータリアンは倒産しないどころか、職業奉仕の實踐の一つとして、自分達が開発したノウ・ハウというものを、自由競争に敗れていった敗者のために公開していきませす。それから、敗れていった敗者のために、職業の倫理と言うものを提唱していったのであります。そのことによつて、その敗者を救済していく作業を組んだのであります。ノウ・ハウを公開していく、そして職業倫理を提唱していく。どのようにしてそれをやつたのか、といひ

ませすと、実は同業組合を作り、そして商工会議所を育てていくことによつてノウ・ハウを公開し、倫理を提唱したのであります。そして、自由競争に敗れていった敗者を救済していく、という作業を組んでいったわけでありませす。これがアメリカの経済社会の中でロータリーが果たした最大の功績の一つであつた、ということがいえるのであります。

1905年当時でありますから、アメリカの諸都市、たとえばニューヨーク、ボストン、ロサンゼルス、シカゴとかには既に、すでに商工会議所はたくさんございませす。しかし南北戦争後のアメリカ社会の工業化の波があまりに激しかった為、人口の急激な都市集結が始まりませす、都市機能が完全にマヒしてしまつたので、キリスト者でさえ行方を見失つてしまつていたわけでありませす。従って商工会議所も何をしてよいか全くわからない状況にあつたということがいえると思ひませす。

そのような状況の中で、ロータリーは同業組合を作り、そして商工会議所を育てながら、自由競争に敗れて行つた敗者を救済していったわけでありませす。1910年から1942年まで32年間にわたつて国際ロータリーの事務総長を務め上げたチェスレイ・ペリーという偉大な組織管理者がいます。彼は「ロータリーが出来たときのことを考えてみよう。アメリカ経済社会に同業組合は一つも無かつた。これは全てロータリーが作つていった。商工会議所も殆んどなかつた、あるにはあつたけれど、あるものはまったくやる気を無くしていた。この商工会議所のない都市に商工会議所を作り、そしてすでにある商工会議所を倫理を提唱していく団体としてよみがえらせていった。これがロータリーが、アメリカ経済社会に残した最大の功績である。ロータリーの功績は歴然たるものがある。」とチェスレイ・ペリーは言ひきつていませす。このように同業組合と商工会議所というものは、非常に重要な機能をもっているのでありませす、ロータリー運動がこのアメリカ経済社会に残した最大の功績だということがいえるだろうと思ひませす。

以上が20世紀前半のアメリカにおけるロータリーの足跡であります。最初の20年が原理探求のロータリー、そしてあとの20年が實踐のロータリーだという誠に素晴らしい足跡を残しておるのでありませす、しかし、やがてアメリカのロータリーにも職業倫理の衰退という現象が起つてまいりませす、20世紀の後半から、だんだんと衰退を始めて行くのでありませす。

ひるがえつて日本のロータリーはどうか、と言ひませす。1920年大正9年10月20日、東京丸の内銀行クラブという古色蒼然たる建物に東京ロータリークラブが、初めて呱呱の声を上げませす。それから1940年までの20年間、20世紀の前半に素晴らしいロータリーを作り上げていたのでありませす。

まず、倫理運動としての日本のロータリーはどう言うものであったか。1928年昭和3年、満州の大連ロータリークラブに、古沢文作さんというすばらしいロータリアンがいました。彼は、いち早くロータリーの源流を探りたいと、一生懸命勉強致しまして、先ほど御紹介致しました1915年のサンフランシスコの国際大会で採択されました、あの「ロータリー道徳律」即ち全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓を発見するのであります。その11箇条からなる職業倫理訓、これを日夜お経の如く熟読玩味しまして、完全に自家役籠中のものにしたのであります。そしてその11箇条のドキュメントを5箇条の日本語に置き換えたのであります。そして、これを大連ロータリークラブのロータリー宣言と称して、毎週例会のはじめにそれを朗読して、それから例会を始めたと言うエピソードが伝わっております。昭和4年、その翌年、日本における第1回の地区大会が催された時に、日本の初代のガバナーである米山梅吉先生は「古沢文作さんこそロータリアンの鏡である」と、言って激賞した事実が残っております。この古沢文作さんの作った5箇条にわたる大連クラブの宣言というものはその後、日本のロータリーの職業奉仕のバックボーンになっていたということは、まぎれもない事実でございます。このように致しまして戦前のロータリーは、主として職業奉仕を中心としたロータリー運動を展開していたといえると思います。そして不幸にして、1940年、(昭和15年)軍閥の弾圧によって全日本のロータリークラブが解散するに至ったのであります。時に昭和15年9月11日でございます。東京ロータリークラブが最後に解散を致しまして、日本のロータリークラブは国際ロータリーから離脱をしてしまったのであります。

しかし、それで日本のロータリー運動と言うものが、終わったのかと言うと、終わらなかったであります。一つの例をあげますと、神戸ロータリークラブ、私は神戸ロータリークラブの直木太郎先生から、いろんなことを教わっておりますが、直木さんが述懐しておられました。神戸ロータリークラブが解散したのは、15年の9月5日であります。それでロータリーをやめたわけではございませんで、その一週間後の9月12日には、神戸ロータリークラブという名前はもう使えませんが、例会日が木曜日であったから、神戸木曜会と名前を変えまして、例会運動を続けて行ったのであります。ある人は、それはロータリークラブが解散したのだから、名前を変えてやったらいいじゃないかと、思われる人があるかもしれませんが、どう言う理由で日本のロータリークラブが解散したのか、その理由を考えますと、これはただ事ではないのであります。ロータリークラブは、弾圧によって壊滅したということ、その理由は、当時の軍閥が、ロータリークラブというのは、アメリカに本部のあるスパイの手先だとか、

或いは、フリーメーソンの隠れ蓑だという汚名を着せられて、弾圧に弾圧を加えられて、ついに解散したわけでありまして。従って、なぜ解散させられたのかという理由を考えますと、解散した後で、また、同じようにメンバーが同じところで集まって会合を開いた、ということになりますと、ひとつ間違ったら、憲兵隊にしょっ引かれると言う恐れが十分にあったのであります。そのように、隠れキリシタンのような状況にありながら、ロータリー運動を続けて行ったということは、大変素晴らしいことだといってもよろしかろうと思えます。

やがて、神戸が戦災で壊滅します。もちろん電気も消えます。例会場でありますオリエンタルホテルも壊滅したのであります。そこで例会を止めたのかというと、止めなかったのであります。あるビルの地下室に例会場を移しまして、ここでまた、例会を始めたのであります。戦災で停電をしておりますから、電気はありません。廊下にろうそくが揺らめいておるといふようなところを通りぬけて、みんな弁当持参で、ロータリー運動を続けて行った。そういうエネルギーに対してやはり我々は敬意を払わなければならぬと思います。戦争が終わっても、そのようにして例会を続けていきまして、結局昭和24年に、9年間の空白の後に、国際ロータリーに復帰する訳であります。この先輩達のエネルギーが、昭和24年に国際ロータリーに復帰してから、飛躍的なロータリー拡大のエネルギーになっていったということは、まぎれもない事実であります。その当時軍閥の弾圧によって壊滅したクラブは、日本国内でわずかに48クラブであります。日本国内で37クラブ。朝鮮、満州に4クラブずつ、そして台湾に3クラブでした。合計48クラブ、ロータリアンの数は2142名。本当に少ない一握りのロータリアンの集団であったのであります。今申し上げましたように、なかなか、芯のしっかりしたロータリアンの集団であったということがいえるだろうと思えます。これが20世紀前半の日本のロータリーの足跡であります。

しかし、やがて日本のロータリーも20世紀の後半になりますと、だんだんと衰退の道を歩み始めたわけでありまして。その最大の原因は何か、といひますと、ロータリアンがロータリーの核にある原則を守らないようになってきた事でありまして。ロータリーの偉大なる思想家でございました、ハロルド・トーマス、ニュージーランドのオークランドロータリークラブの出身であります。彼が「ロータリーモザイク」という本を著わしております。彼は百歳の長寿を全うしたのですが、自分がロータリー運動の中で、じかに体験してきたことを、年代別に書き綴って行った素晴らしいドキュメントであります。その一番最後の章の1970年代の章の所に、彼は言っているのであります。「我々は今、憂慮すべき事態に直面をしておる。それは何かというと、ロータリーを

今日の力と安定にまで築き上げてきた二つの原則が次第に希薄に更に希薄にされていく傾向がある」

その二つの原則とは一体何んであるか。一つは、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業種一会員の原則。それから第2番目は、規則的例会出席、例会というものは一週間に1回決まった時間に開催して行くという規則的例会出席の原則。この二つの原則はただ単なる原則ではない。この原則のうち、どちらかでも緩やかになっていくと、それはもはやロータリーとは言えない、それほど重要な原則だということを言いきっております。実はこの二つの原則が20世紀後半に至りまして次第に希薄に、更に希薄にされて行くという、まさにハロルド・トーマスの予言の如く、ロータリーの衰退が始まってきたというのが原状であります。

一業種一会員の原則を例をもって紹介しますと、これは一つの職種から一人だけ会員を選ぶ、しかも良質な会員を選ぶという原則であります。一人だけではなくて、数人を選んでいきます。例えば、ある職種について職業分類をいろいろな形で悪用いたします。例えば、お酒を作る会社のロータリアンが数人入っている、どう言う形で入っているかということ、職業分類には、信用金庫だとか山林売買だとか農業経営とか、いろんな形の職業分類になっているのであります。その人達の職業をみますと、〇〇酒造(株)という酒の会社であります。こう言う形で1つの職種から数人の同業者が入会してくるわけでありまして。それから、1915年にロータリー通解という素晴らしい本を書いたガイ・ガンディガーという人がいます。これは1923年の国際ロータリーの会長であります。彼が言っております。「自分の庭にバラの木を一本植えたことをもって、農業経営という職業分類を作ってはならない。」こう言う形で職業分類を、悪用する弊害が出てきたということを一週間に上げておけば、よろしかろうと思っております。

それから私は、最近あるアメリカ大都市の大クラブの職業分類表を手にいれました。それを見て驚いたのであります。そのクラブの職業分類表に、弁護士が50人以上登録されているのであります。一業種一会員制ではないのであります。一業種50人制であります。それから同じそのクラブの職業分類表を見ますと、公認会計士が20名を超えております。こういう現状を見ますと、一業種一会員制というロータリーの基本原則というもの、非常にゆるやかに、ゆるめられてしまったということが言えるわけでありまして。これは、何を意味するかと言ひますと、ロータリアンに、ロータリーのルールを守る心が無くなったということの意味するわけでありまして。ルールを守る心がなくなった、それ以上に、ルールをそもそも知らないのではいかと、いう程ロータリーの衰退は甚だしくなってきたということが言えるだろうと思っております。こう言う状態で、果たし

て正しいロータリー運動が展開できるのかどうか、なぜ一業種一会員制ということが言われていたのか、なぜ規則正しい例会出席と言っているのか、その意味を、われわれは謙虚に反省しなければならないだろうと思っております。これが、私達がこれから進んで行く、21世紀のロータリーを築き上げて行く一番重要な課題であろうと思っております。

復習的に、なぜ一業種一会員制をとったのかということをおし上げておきます。これはロータリーの、「いろは」に属することなのであります。要するに一言でいえば、同業者を排除しよう、ということでありまして。ロータリーは、みんなで仲良くする、仲良くするためには同業者がいると、どうしても仲良くなれない、なぜかといひますと、同業者というのは、自由競争の中で、お互いに食うか、食われるかの関係にあります。従って、同業者が居ると、本当に心を開いて仲良くなるのが出来ない。従って同業者を排除して、一つの職種から一人だけを会員に選ぶという、一業種一会員制という原則が出来あがっているわけでありまして。さらに、地域社会に存在する全ての職種から、一人ずつロータリアンを選んでくる、そして、そのロータリアンに毎週例会で自己研鑽に励んで頂いて、ロータリー精神を身につける、ロータリーの心を身につけたら、今度は地域へ帰ってロータリーの精神をアピールしていただく、奉仕の実践をしていただく、そのために全ての職種から、一人づつ良質な人達を選ぼうという、これが、一業種一会員制の本来の形でございます。しかし、実際は先ほど申し上げましたように、一つの職種から数人、数十人という人を選んでおります。これでは一業種一会員制の本当の効果は出てこない、言わなければならないわけでありまして。ハロルド・トーマスが指摘していますように、一業種一会員制が衰退して行く、そして、ロータリーは崩壊の危機に直面しているということがいえるだろうと思っております。

それからなぜ、規則的な例会出席というものを、原則としておるのか、これにつきましては、日本の大都会のロータリーを見ておきますと、その退廃ぶりは目に余るものがあります。その最大の原因は、メイクアップのルールを守らない、ロータリーの基本的なルールを守らなくなったということが、衰退の原因だろうと思っております。ロータリアンと言うものは、元来、自分というものを絶対視しまして、厳しく自分でルールを守る人のことでもあります。

一つ例を出しておきます。兵庫県の西宮ロータリークラブに、八馬啓さんという私の心から尊敬するロータリアンがおられます。彼が、私どものロータリークラブにメイクアップに来られました時、彼は一分遅れたのです。すると彼は、「一分遅れました。だから、今日はメイクアップにしないでください。しかし、せっかく来たのだから、皆さんと食事をしたいと思ひます。」と言ってビジターフィーを

払って、そして食事をして最後まで例会を楽しんでお帰りになりました。私は、まだその頃はロータリーに入会して間がなかったころなのでありますが、それを見まして「ああ、これこそ本当のロータリアンだ」と教えられることがございました。ロータリーというものは、自分を律することに極めて厳しい、そう言う人達の集団であるということを思い知ったわけでありました。このように1分遅れても自分を寛やかにしない、そう言う厳しさが、ロータリーの根本にあるだろうと思います。従って途中で退席するなどとんでもない話でありまして、例会というものは、点鐘に始まって点鐘に終わる。例えば、一時間の例会であれば、一時間100パーセントその場に出席するのが、本来のロータリーのありかたでありまして、これはロータリアンの基本的マナーであります。しかし、近来ロータリアンがロータリーの基本的ルールを守らなくなってきた、その一つの原因は、60%ルール、例会時間の60%在籍すれば、それで出席と認めるというルールが定款上のルールとして採択されるにいたって、この墮落が始まって行くと、私は思うわけでありまして、やはりこの基本的ルールを守る、この心が無くなると、ロータリーの魅力が無くなって、魅力がなくなれば、会員は減少していきます。ロータリーが衰退して行きます。前年度のラビッツア会長が大変嘆いておられました。ロータリアンの質の向上を呼びかけられていたのですが、ロータリアンの殆どの人達が、ロータリーの基本的なルールを守らなくなった。それがロータリーに魅力がなくなり、そして会員が減少する原因であるといつて、嘆いておられたわけでありました。

昔は、私の知る限りでは、一旦ロータリークラブに入ったら、ロータリーを辞める人はいなかったものであります。このごろは簡単に辞めて行きます。これはロータリアンの教育の問題もあるだろうと思います。従って、21世紀のロータリーにとって、緊急の課題というものは何かというと、これはロータリアン教育の問題であります。昔のロータリークラブは、ロータリアンを教育することについては、まさに心血を注いだと言いきっていいだろうと思います。いろいろなエピソードが残っています。一つ紹介しておきますが、私の親友が昔神戸ロータリークラブに入ることになりました。彼は、神戸ロータリークラブなんて、あんな堅苦しいところは嫌だといつて、断っていたのですが、ついに断りきれなくなって入ることになりました。するとその推薦者が、俺の会社に朝9時に来い、というのです。彼は9時に行きました。そうすると、9時から延々とロータリーの講義が続くのです。ロータリアンのマナー、ロータリーの歴史、ロータリーの思想、ロータリーの実践と続いて、午後の4時まで講義が続いたのであります。彼はうんざりしましたが、何も質問しないで帰るのは失礼だと思つて、一つ質問をしたのです。そうす

るとその人は、「おまえはまだ何もわかっていないから、明日もう一日来い」、また次の日、9時から講義を聞かされて、そしてやっと、神戸ロータリークラブに入ることが出来たと言っていました。一体これは何を意味するのでしょうか。

ロータリークラブと言うところは、会員だけの水いらずの親睦の場、そして自己研鑽の場なのであります。そう言う場に、一人でも異質な人が混じりこみますと、会全体の親睦を崩してしまいます。ロータリアンのこの親睦、水いらずの親睦の場と言うものは、何億円を出しても買えないほど尊いものなのであります。ロータリークラブの点鐘の鐘などは、お金をだせば買えます。ロータリーの旗だつて、金を出せば買えます。しかし、ロータリークラブの親睦というものは、これは何億円出しても買えないほど尊いものなのであります。このロータリークラブの親睦と言うものは、一人でも異質な人間が混じりこむということによって崩壊して行くのであります。したがってロータリークラブに会員を推薦する人は、この人なら大丈夫だと保証出来る人でなければ、みだりに会員を推薦してはならない、そうでなければ、自分がつまらない人間を推薦したために、フェローロータリアン、全体の親睦を潰してしまう、非常な迷惑をかけることになる。だからこそロータリアンの教育ということ、徹底的にうるさく言ったのが、昔のロータリークラブだったのであります。自分達の親睦、自分達のクラブは自分達で守るのだ、これがクラブ自治権というものなのであります。自分達のクラブは、人の采配は受けない、自分達のクラブは、自分達で守り通していく。そして自分達の作り上げた親睦の中で、本当のロータリーをエンジョイしていく、これがロータリアンの基本的な考え方だったのであります。従って、昔、大阪ロータリークラブは、ロータリー情報委員会などという、ジャラジャラした名前は使っていませんでした。ロータリアン教育委員会とズバリそのものの名前をつけてロータリアンを教育していました。

このように、ロータリーの質を維持するためにそれぞれのクラブは、いろんな工夫をしています。もう一つ紹介しておきます。東京南クラブ。黒澤張三先生、職業奉仕の権化のような人がおられるところであります。東京南クラブでは、例会場に、白いテーブルクロスを掛けたテーブルがありますが、正面の二つのテーブルだけは、グリーン色のテーブルクロスが掛かっています。それは何を意味するかというと、グリーンというのは、フレッシュマンの色なのであります。したがってロータリークラブに入会後、6ヶ月間以内の人達は、必ずそのグリーン色のテーブルに着席します。そのグリーン色のテーブルには、そのクラブの元会長、元幹事、情報委員長、パストガバナー等、ロータリー歴の古いロータリアンが、何人か必ずそのテーブルに座って、毎週口コミで、

ロータリアンの教育をしていく、そして6ヶ月経ったら、やっと白いテーブル、一般のテーブルに戻る、その間はロータリアンの教育の期間だという形で教育をしていくのであります。黒澤先生に二、三年前にお会いした時に「まだやっていますか?」とお聞きしましたら、にこにこしながら「まだやっていますよ。」とおっしゃっていました。

このようにロータリークラブと言うのは、それぞれのクラブが、ロータリアンを教育していく。昔はこういう意味で、大変クラブの教育機能というものが徹底していたのであります。最近、クラブ自身の教育機能が非常に衰退いたしました。今、東京南クラブのような二、三の例外を除いては、殆ど教育機能というものは機能していません。あるショッキングな事例に私は会いました。ある大都会でロータリアンが一人辞めたというのであります。一年未満で辞めていったのです。彼がその辞めた理由は「こんなロータリークラブみたいな所に入っていたって一銭も儲からない、一銭の得にもならないから。」といつて辞めたというのであります。そもそも、そういう人をクラブに推薦すること自体がおかしいのです。しかし、いったん推薦したのであれば、徹底的に教育をして、本当のロータリアンになってもらわなければならない。しかし、その教育は一切なされていない。従って、一年も経たないうちにささと辞めて行く、ということでありまして、入会後もそのクラブは何の教育もしていなかった。まさに産みっぱなしであります。こういう状況ではロータリーの衰退は当然のことでありまして。

では、こういう衰退を食い止めて、21世紀のロータリーに再び往年の繁栄を取り戻すことができるのか。それはただ一つ。ロータリアンが約束を守ると言うこと。そして、約束を守ると言うことは、世の中の約束、すなわち倫理を守ることでありまして。約束が守れない、と言うことは、倫理が退廃していることを意味します。ことにロータリアンは職業人の集まりであります。職業倫理を守らなければならない。20世紀の末期、皆さんご存知の、あのバブルの崩壊の頃を思い出せば解かるとおもいます。あの頃は、日本中が狂っていました。ロータリアンを含めて、全ての職業人が倫理を忘れてしまった結果であります。従って21世紀のロータリアンの進む道は、約束を守り、そして職業奉仕に徹することでありまして。職業倫理を高め、そして先ほど紹介しました、1930年代のアメリカのロータリーがやったように倫理を高め、ノウハウを公開していく。本当の同業組合を作り、そして商工会議所を育てていく、そういう方向に今一度、力を致す必要があるのではないかとおもうのであります。しかし、他にも為すべきことはたくさんあります。

例えば、ロータリーには二つの側面があります。一つはロータリー・オン・セオリー。理論に基づく

ロータリーという側面があり、もう一つはロータリー・イン・アクション。行動するロータリー、或いは実践のロータリーという側面があります。今まで私の話は、主として理論的な側面についてのお話を申し上げてまいりました。しかし、実践論を忘れてはならないだろうと思つてあります。ロータリー財団も大変大事なことであります。素晴らしい仕事をしてあります。あれは、全世界に存在する財団制度にない、ロータリーにしかない素晴らしい一面をもつてあります。なぜかと言いますと、普通、財団制度と言うものは、その財団の所在地にくる若者に対して、奨学金を出して行くのが、教育を目的とする財団なのであります。米山奨学会もそうでありまして。フルブライト委員会もそうでありまして。フォード財団もそうでありまして。すべて財団所在地に来る若者達に、奨学金を出して行く、これが通常の形であります。ロータリー財団は、どこの国の若者がどこの国へ行っても奨学金を出します。ただ一つ条件があります。受け取り機関としてのロータリークラブが存在すると言うことです。ロータリークラブのあるところであれば、どこの国の若者がどこの国へ行っても奨学金を出す、こういう素晴らしい特色を持った財団はロータリー財団しかないのであります。従って、ロータリー財団は、私達が温かく見守りながら、それに対して応援を惜しむことはあつてはならないと思つてあります。

その他に、ポリオ・プラスの問題がありますし、人道的ないろんなプログラムがたくさんございます。そういうものにも、やはり力を致さねばならない。WCS(世界社会奉仕)の問題もあります。これもロータリー・イン・アクションの大変重要な場面であります。えてしてロータリーは理論に走りまして、その実践を忘れることもございます。こう言うことは絶対にあつてはならない、ロータリアンというものは、弱者に涙を流す心がなくてはならない。人のためには涙を流し、己のためには汗を流す、こういう心構えがロータリアンとしては必要であろうと思つてあります。このように致しまして、ロータリー・オン・セオリー。理論に基づくロータリー、これは大事であります。ロータリー・イン・アクション。実践のロータリー、これもまた大事であります。このどちらが失われても、本当のロータリアンとは言えないということ、申し上げなければならないだろうと思つてあります。このように致しまして、この両面をお互いに切磋琢磨しながら進めていく、そのことによって初めて、21世紀のロータリーに明るい日差しが見えてくるのではないかとおもうのであります。御清聴ありがとうございました。